

いとおくゆかしけれど・・・

～ *an inner essence* ～



2002.2.10 (日) 14:30～
大阪市立弁天町市民学習センター

「音楽とは何か」いきなりではありませんが、時々私はこんなことを考えます。本日のテーマは「いとおくゆかしけれど…」です。“おくゆかしい”を辞書でひくと「その奥にあるものに心がひかれる感じである。その先が見たい、聞きたい、知りたい。(国語大辞典 小学館 1988)」となっています。“いと”は「たいへん、非常に」と言った意味です。そしてもう一つのテーマは“an inner essence”です。これを日本語にすると“内に秘められた本質(真実)”といったところでしょうか。

「音楽」とは実に“一過性”の強いものです。今でこそ音楽は居ながらにして聴くことができますが、本日取り上げるような18世紀や19世紀始めに音楽を聞くことは大変なことだったでしょう。自分で演奏するか、演奏家を呼ぶか、わざわざ出かけないといけません。当時音楽を聴くと言うことはとても贅沢なことだったでしょう。作曲家も録音できない自分の作品をいかに印象づけるかに全力を注ぎます。何度も同じ旋律を奏でたり、変奏曲にしたり、実に様々な工夫をしています。“一過性の強いものである”ことを強く意識して。

そんな中で数人の室内楽は作曲家自らが演奏することができ、より強く自身の想いを伝えやすい分野です。一方でよほど有名な室内楽曲でない限り、その曲にまつわるエピソードや作曲家の思いなどはあまり知られていません。しかし、楽譜は雄弁に語ります。私たちは楽譜を通して作曲家が伝えなかった想いを感ずることができます。そしてそれを聞き手に伝えることができます。また、室内楽では楽譜に作曲家の指示が少ないのも多く、聞き手の反応に応じて即興性にまかされている部分もあります。

“一過性”と“即興性”。まさに偶然にゆだねられたような形態をとりながら輻輳する感情。作曲家の思い、演奏者の思い、聞き手の思い、それらを響きだけで伝えあいます。実に“おくゆかしい”と思いませんか？音楽は、作曲家と演奏者と聞き手がお互いに作り出すものです。室内楽は特にその三者の距離が近く、各々の思いがぶつかり合っ一つの音楽を作りあげていくことがたやすいです。それが室内楽の最大の魅力です。音楽は生で体験して初めて本物になるような気がします。そして音楽は、たった1度きりで2度と体験できないものです。これこそ究極の贅沢だとは思いませんか？それと同時に、「いとおくゆかしけれど」それを得るのはとても困難で、同時にかけがえないものだと思います。

本日はご来場いただきまして誠にありがとうございます。最後まで、どうぞごゆっくりお楽しみください。そしてたった一つの音楽を作り出すメンバーの1人になってください。“今”と“生”を楽しんで。

橋本 頼幸

— Program —

ハイドン

Joseph Haydn (1732-1809)

ロンドントリオ 第1番 ハ長調

The London Trios for Flute, Violin and Violoncello

I. アレグロモデラート: Allegro moderato

II. アンダンテ: Andante

III. フィナーレヴィヴァーチェ: Finale Vivace

フルート : 船橋 順 ヴァイオリン : 宮木義治
チェロ : 有澤直美

モーツァルト

Wolfgang Amadeus Mozart (1756-1791)

ピアノ、クラリネット、チェロのための三重奏曲 変ホ長調 K.498

「ケーゲルシュタット」

Trio for Piano, Clarinet and Violoncello in E-flat major, K.498

“Kegelstatt”

I. アンダンテ: Andante

II. メヌエット-トリオ: Menuetto - Trio

III. ロンドアレグレット: Rondeaux. Allegretto

クラリネット : 永山 烈 チェロ : 有澤直美
ピアノ : 梅田愛美

〈 休 憩 ~ Intermission ~ 〉

モーツァルト

Wolfgang Amadeus Mozart (1756-1791)

ピアノとヴァイオリンのためのソナタ長調No.35 K.379

Sonata for Piano and Violin in G major, No.35 K.379

I. アダージョ- アレグロ: Adagio - Allegro

II. 主題と変奏

アンダンティーノカンタービレ- アダージョ- アレグレット:

Thema and Variation

Andantino cantabile - Adagio - Allegretto

ヴァイオリン : 宮木義治 ピアノ : 梅田愛美

ダンツイ

Franz Danzi (1763-1826)

ピアノとクラリネットのためのソナタ変ロ長調

Sonata for Piano and Clarinet in B-flat major

I. アレグロ: Allegro

II. アンダンテソステヌート: Andante sostenuto

III. アレグレット: Allegretto

クラリネット : 橋本頼幸 ピアノ : 梅田愛美

ロンドントリオ 第1番 ハ長調

ハイドン

古典派音楽の形式を確立したハイドンの音楽は、その円満な人柄からか、極めてメカニックな論理性に支配されています。しかし、その論理性に豊かな色づけと楽しさを与えていて、メカニズムから堅さを取り除いた親友モーツアルトの影響をうけています。ロンドントリオ第1番はソナタ形式やロンド形式が取り入れられています。フルートとヴァイオリンが同じ音形を和音で奏したり、ヴァイオリンが積極的にフルートとの掛け合いや模倣を演じ、またチェロも部分的にそれに参加する、これらの楽器の掛け合いが絶妙で非常に楽しい曲です。ハイドンは片田舎の車大工の子で27歳になるまでほとんど記録はありません。一方モーツアルトは才能ある父に育てられ、神童といわれ幼い頃から宮廷を渡り歩きました。モーツアルトの音楽が繊細かつ優雅で都会的な印象を与えるのに対し、ハイドンの音楽が素直で素朴な印象を与えるのも、こういった人生の違いがあったからでしょう。人格者で努力の人ハイドンと奇人天才モーツアルトの音楽を聴き比べてみるのも面白いのではないのでしょうか。(J.Funahashi)

ピアノ、クラリネット、チェロのための三重奏曲 変ホ長調 K.498

「ケーゲルシュタット」

モーツアルト

この曲は、ケーゲルシュタット(当時流行したボウリングに似た遊び)に興じながら作ったといわれているため、このように呼ばれています。1976年(20才)に書かれたこの曲は、晩年のクラリネット五重奏曲やクラリネット協奏曲ほど完成度は高くありません。しかしこの曲には晩年に感じるようなもの悲しさがあります。他のモーツアルトの作品に感じられるような、突き抜けたような明るさや天真爛漫さではなく、明るく振る舞ってはいるものの、内にある悲しさや憂い、虚無感のようなものが根底に流れている感じがします。そのような、美しい旋律で飾られてはいるけれど、本当はモーツアルトはなにを感じていたのか。そんなこの曲の中に秘められた悲しさや寂しさを感じていただければ、と思います。今回は、本来の編成(クラリネット・ヴィオラ・ピアノ)ではなく、クラリネット・チェロ・ピアノの編成で演奏します。(A.Nagayama)

ピアノとヴァイオリンのためのソナタ ト長調 No.35 K.379

モーツアルト

モーツアルトはそれぞれ6曲から成る2集のバイオリンソナタを残した。K379のソナタは1781年(25歳)の時の作品である。この年は4年間すごしたパリを離れウィーンに定住することになり、また翌年にはコンスタンツェとの結婚がありおそらくその生涯の中でもっとも充実した、幸せな時期であったと推測されます。創作意欲にあふれたこれらのソナタは互いの楽器が複雑に絡み合って音楽が進行していく二重奏的であるという点でそれまでのソナタとは明らかに異なっています。この曲についてモーツアルトは、父レオポルドに宛てた手紙の中で「バイオリンの伴奏を持つ私のためのソナタで、昨晚11時から12時の間に作曲しました。ただ時間が足りなかったのでピアノパートしか書き上げていません。残りは私の頭の中にあります。」と述べている。何とも天才ぶりがよくわかると同時に、この曲をどう位置づけていたかもよくわかります。しかし、モーツアルトがたった1時間で書き上げた曲を私は半年かけて練習している。なんとも複雑な思いがした。(Y.Miyaki)

ピアノとクラリネットのためのソナタ変ロ長調

ダンツィ

イタリア系ドイツ人作曲家であるダンツィは、チェロ奏者であり、作曲や指揮も手がけた。ベートーベンとはほぼ同じ時代を生きているが、その生き方も良く似ている。ベートーベンと比べるまでもなく無名ではあるが、ダンツィは初期ロマン主義音楽の中では重要な位置を占める人物である。現在では全部で9曲ある木管五重奏が良く知られているが、実際には協奏曲や室内楽曲をはじめオペラと舞台音楽も多い。(と言うことを私もはじめて知った。)このソナタはモーツアルトの作品(とりわけバイオリンソナタ)に影響されている。曲の組み立て方は論理的でモーツアルトに習っているが、旋律や楽器の使い方はモーツアルトやベートーベンに比べて実に自由であり、スケールが大きい。個人的親交のあったウエーバーの作風につながるころがある。ハイドンやモーツアルトのようなメカニックで理論的な音楽(古典派)と、その後にてくるみたまま感じたままを素直に表現する音楽(ロマン派)の両面を合わせ持っており、その意味では古典派とロマン派の橋渡しの作品である。(Y.Hashimoto)

— Members —

有澤 直美 (Naomi ARISAWA) ; チェロ



有澤さんは、昨年ご結婚されて姓が変わられたのですが、私たちはつい、なじみのある旧姓のほうでお呼びしてしまいます。(編集注:免許証の名義もまだ旧姓だそうです。)最近も、私宛に送っていただいた郵便物に新姓のほうが書かれてあり、一瞬誰からなのか悩んでしまいました。それはさておき、有澤さんはこの演奏会メンバーの中では最古参の人であり、また最年長者でもあります。それゆえ私は、有澤さんに対してだけは畏敬の念をもって接していたのですが、今回の演奏でご一緒させていただき、だんだん彼女の顔を見るのが本当に怖くなってきています。微笑みを湛えたその裏側で、多分無茶苦茶怒ってるんだろうな、と。この場をお借りして謝罪させていただきます。ごめんなさい。

梅田 愛美 (Manami UMEDA) ; ピアノ



梅田さんはかわいい、スタイル良し、そして落ち着いた雰囲気だけどコツコツ頑張り屋さんです。この室内楽チームの唯一のピアニストゆえ、他のメンバーが1曲出演のところをプログラムの3曲弾きづめです。音譜の数だってみんなの数倍は弾いています。古典、ロマン派はもちろん近代、現代もみんながやりたいと言えばなんでも頑張ってくれて、彼女なしには演奏会できないのでホント頭がさがります。本日のプログラムではモーツァルトのソナタの最初のピアノは特にいい感じです。本日のピアノのある曲はピアノがメインで他はみんな伴奏のつもりです(笑)。

永山 烈 (Atsushi NAGAYAMA) ; クラリネット



今回私は永山烈という人物が何者なのか、ということ調べるために”Yahoo! Japan(インターネット上のデータを検索するページ)”に”永山烈”と入れて検索してみた。すると、2件引っかかった。まず最初に出てきたのが、大阪市立大学理学部の「代謝調節機能学(一般生理学)研究室」だった。なんだかよくわからない研究室の名前ではあるが、どうやら彼は学部と修士の頃にここにいらしい。さらにそのページによると、なんと彼は1997年3月に日本植物生理学会なるものに論文を発表しているらしいことも突き止めた。なるほど、どうりで彼は和歌山で高校の先生(理科)をしているはず。そんな彼は本日はクラリネットを持ってモーツァルトを奏でる。世界は実に不思議である。(ちなみにもう一件は、このコンサートのホームページでした。)

橋本 頼幸 (Yoritaka HASHIMOTO) ; クラリネット



我々のリーダー的存在である「パパ」は、建築関係の激務をこなしながら、一方では大学院博士過程に在籍しており、また家に帰れば2児の良き父である。それに加えて演奏会の練習もこなし、我々の演奏にアドバイスをし、また練習場所の確保から演奏会の手はずまで全て整えてしまう(感謝感謝)。いったい毎日どんな生活を送っているのか凡人の私には全く想像できない。そんな多忙な彼は今年に入って楽器を衝動買いしたという。めちゃ良く鳴る楽器で、大変気に入っているらしい。本日はかれの十八番である古典派の曲ということもあり、素晴らしい演奏を披露してくれるでしょう。

船橋 順 (Jun FUNAHASHI) ; フルート



最近、彼との間に意外と共通点があることに気づいた。
(1)もう28才にもなるのに去年まで大阪で学生したこと。
(2)学位をもらって卒業後、ようやく社会に出たと思ったら大阪から遠く離れた田舎勤務になったこと。(編集注:ちなみに、静岡です。)
(3)にもかかわらず、演奏会のメンバーとして定着し2ヶ月に1回の練習に片道何時間もかけて大阪にやってくること。
そんな彼とは今回で2度目のアンサンブルです。今回も彼の正確で優雅なフルートさばきで皆を導いてくれることでしょう。

宮木 義治 (Yoshiharu MIYAKI) ; ヴァイオリン



宮木さんは昨年4月によりやく社会人となりました。勤務先の都合で富山県に転居してしまって、かなり遠方へ行ってしまうりましたが、気合と根性?で続いています。練習日になると、バツヤ色(byパパ)の愛車に乗って、高速を5時間かけて大阪へやってきます。先日、「どうしてこの色の車にしたの?」と尋ねましたら、「俺、緑色好きやもん」と一言。それはさておき、今日演奏する曲についてですが、プログラムの3曲目(ヴァイオリンソナタ)にご注目下さい。彼は今回初めてソナタに挑戦します。演奏人数が少ない分、1人あたりの負担が大きく、1つ1つの音に細心の注意を払わなくてはならないので、とても大変です。この大曲に挑むにあたって楽器も買い換えました。年々艶が出てきた彼の繊細な音を、耳をすませて聴いてみて下さい。きっと何か感じていただけるはずですよ。

私は昨年、プログラムのあいさつ文で、

「“新しいものに常に挑戦する気持ち”と“伝統を大切にし、自分のスタイルを守る気持ち”。そのどちらをも受け入れることのできる自由な“心”、それが21世紀をより「ベル・エポック(良き時代)」にするために大切なものではないでしょうか。」と書きました。

改めてもう一度(世界中の人に)言いたい。

**そのどちらをも受け入れることのできる自由な“心”、
あなたにはありますか？**